

「ゴホン〜。コレ……子供……。」

「へエお呼び……………」

「番頭どんはモウ起きてなさるか。」

「ア。番頭はんやつたら、今日一番先きに起きはりました。そいで街頭掃いて水打つて……………」

「シヤイツ。誰がそんな事を訊ねてる。要らん事をベラ〜喋るやない。番頭どんは今何ふしてなさる」

「へエ、お店で帳合ひしてはります。」

「ウム。私が云ふてる。長時お手間は取りませぬ、鳥渡此處まで来てお貰ひ申す。左ふ云ふて行きましょ。」

「へエ。……………あの、番頭はん……………」

「ウムーあかん……………どふ考えてもあかん……………」

「もし番頭はん……………」

「ア、一豪い事した……………川口で船や……………」

「番頭はん。」

「ワツ。叱驚した。……………定吉か、何やい。」

「此方が叱驚しましたがナ、大きな聲出して飛び上んなはる依て、何やと思ひました。あの親旦那が云ふてはります。長時お手間は取りまへん、鳥渡奥まで来てお貰ひ申し度いと……………」

「左様か。……………ウーン来たな……………」

「お手間は取りまへん……………」

「仕様が無い。……………成る様に成りやがれ。……………」

「鳥渡奥まで……………」

「今往くわい。」

「何だす。」

「エ、イ五月蠅い。今直ぐに往くわいッ」

「へエ。……………豪ら相に云ひよるなア……………へエ親旦那、往て参りました。」

「オ、御苦労ぢや。番頭どんは何ふ云ふてたナ。」

「ムー。今其處へ往くわいッ。」

「こふれッ。そりや何と云ふ物言ひぢや。番頭どんはそんな事云ふお人ぢや無い。假令番頭どんが左様云ふたにもせよ。貴様は俺しの前へ来たたらチャンと手を突いて、御番頭さんは唯今お見えになりますと、何故丁寧に物を言わぬ。……………又頬邊を勝らしてゐるな……………主人の前で其顔何ぢや。増長も大がい